

若者からみる 北海道の現在と未来



2016年3月、国の第8期となる「北海道総合開発計画」、北海道の第5次に当たる「北海道総合計画」が策定されました。さらに「地方創生」の掛け声のもと、各市町村が将来の人口ビジョンを示し、それを実現するための「総合戦略」が策定されています。

北海道は全国に先駆けて人口減少時代を迎えていますが、それを踏まえて北海道の資源や特性を生かした将来の展望を描いていくことが、世界の北海道を創っていくこととなります。

これから中心となって未来の北海道、そして日本を担っていく若い世代の皆さんは、今どのようなことを考え、どんな夢を抱いているのでしょうか。2017年新春号を飾る座談会は、道内で学ぶ大学生を

お招きし、北海道への思いや未来に向けた期待について、自由な発想で語っていただきました。

出席者

- 市川 郁也 氏 北海道大学工学部社会基盤計画学研究室4年
岩田美津希 氏 北海学園大学経済学部地域経済学科4年
太田 哲平 氏 室蘭工業大学工学部建築社会基盤系学科4年
戸来 祐紀 氏 札幌大学地域共創学群経営学専攻3年
アドバイザー
関口麻奈美 氏 プランニング・メッシュ代表
コーディネーター
田村 亨 氏 北海道大学大学院工学研究院教授
(本座談会は、2016年11月2日に札幌市内で開催しました)

学生生活の中での地域活動について

田村 皆さん、こんにちは。本日の司会を務める田村です。まず、皆さんから大学生活の中での地域活動を含めて、自己紹介をお願いします。

市川 大阪府八尾市の出身です。子どものころから自然が大好きで、登山やスキー、釣りなどによく出かけていました。北海道の大自然に憧れがあり、山岳部の有名な北海道大学に入学しました。ですが、大学の新生歓迎会でYOSAKOIソーランサークル北海道大学“縁”の先輩方の魅力に惹かれ、結局3年間活動しました。現在は、大学でまちづくりに関する研究をする傍ら、企業の長期インターンにも参加し、インバウンド関連や地域の魅力発信などにも取り組んでいます。

岩田 北海学園大学で地方財政に詳しい西村宣彦准教授のゼミに関わって3年目になります。2014年には、道内で初めて市町村合併し、10年経過した函館市の調査を行いました。写真部にも入っていて、作家として活動する場が少なく、ネットワークが作りにくいので、就職先は東京です。北海道との関わりを持ちながら、北海道の魅力を知ってもらえるような仕事をしたいと思っています。

太田 出身は東京ですが、「水曜どうでしょう」というテレビ番組が好きで、北海道にやってきました。土木を学べる大学はいくつかありましたが、番組に倣ってサイコロで室蘭工業大学に決めました。室蘭市内には古本屋がないので、地域の人から古本を回収して無料で市民に提供する「室蘭本まつり」の実行委員の代表を務めていました。また、2015年には宮城県女川町にも行っていました。女川町は東日本大震災で8割以上の住居が倒壊したまちです。子どもの教育活動を行っているNPO法人カタリバが運営している放課後学校「女川向学館」で数学の先生をしていました。北海道を離れて被災地の現状を目の当たりにし、改めて北海道を考えるいい機会になりました。

戸来 札幌大学で生産管理や品質管理に詳しい経営学の中山健一郎教授のゼミに所属して2年目です。自由

なゼミで決まったテーマはありませんが、最近では地域に関連した活動が多くなっています。2015年に釧路公立大学で開催されたSCAN（北海道学生研究会）^{*1}の合同研究発表会でニセコの地方創生について発表し、優秀論文賞を受賞しました。吹奏楽団にも入っていて、地元の小学校や老人ホームでの演奏など、地域に根差した活動にも関わっています。今日は私だけが3年生で就職活動は模索状態ですが、これを機会に将来の道を考えていきたいと思っています。

関口 フリーで地域の取材や調査活動などをしていません。日ごろ20代の皆さんとお話する機会がないので、今日は楽しみにしています。

地域活動で感じる北海道の姿

田村 皆さんが地域活動の中で感じたことや面白かったことはどんなことですか。

市川 “縁”での3年間は素晴らしいものでした。道内外のお祭りに数えきれないほど参加し、ヒッチハイクで各地を転々とする日々を過ごしました。泊まるどころがなく、野宿する場所を探して漁港を歩いていたら、漁師のおじさんが家に泊まらせてくださり、夕飯に舟盛りが出てくるということもありました。日本各地には素晴らしい土地がたくさんあり、温かい人が数え切れないほどいます。一方、国連が発表した世界幸福度ランキングで日本は53位。もったいないと思うと同時に、それを変えていきたいと思いました。自分たちやその地域、国の魅力を自覚して、誇りをもって幸せに暮らせるような社会にしていきたいと思っています。

インターンでタイの旅行博に行ったら、訪れてみたい日本の地域に来場者がシールを貼っていくブースがあり、北海道だけ、はみ出るほどたくさんのシールが貼られていました。タイや台湾、香港などでは北海道が爆発的な人気です。この事実を私たちが知ることにも意味があると思います。北海道をはじめとして、様々な地域の魅力を見つめ直し、国内外に発信し



岩田 美津希氏

税金に頼らず地方がどう生き抜くか。人口減少そのものより、それを問題だと認識していない地域が多過ぎ。

ていくような取り組みに関わっていきたいです。

岩田 ゼミでは税金に頼らず、地方がどう生き抜いていくかをテーマに活動してきました。地方の人口が減少していることよりも、それを問題だと認識していない市町村が多過ぎるように思います。市町村の温度差の大きさに驚きました。もっと問題意識を持ってもらいたいという思いが、活動の原動力です。春には東京に行ってしまうのですが、やはり文化の発信地は東京。でも、北海道の良さも理解しています。例えば、最近では保育園も子どもたちを過保護に扱うのではなく、北海道の自然の中で生きる力を育てていくような運営をしているところが出てきています。それを実践できる北海道の魅力をもっと知ってもらいたいと思います。

戸来 私はゼミよりも吹奏楽団のために大学に行っているかも…。音楽だけで地域を活性化させることは難しくても、音楽を通じていろいろな人と関わっていきたいと思っています。

道外人が感じる北海道の閉鎖性の克服

太田 僕は雪に憧れて北海道にやってきた一面があります。市川さんは大阪出身ですが、北海道にどんな思いを抱いていますか。

市川 今でも自然は大好きです。研究そっちのけで山登りに行ったりもします。先日は、阿寒湖近くの雌阿寒岳に登りました。北海道にいるとなぜか落ち着くし、生活していてもしんどくない。就職活動で東京に行きま

したが、国家間競争の真ただ中という感じでした。

岩田 北海道の良さ、スローライフですね。

市川 その一方で、岩田さんがおっしゃったようにネットワークが作りにくい、情報が伝わりにくいという一面があると思います。道外出身者や外国人は北海道の魅力に気づいているのに、道民が気づいていない。もったいないと思います。太田さんは北海道と東京の違いを感じていますか。

太田 東京人は無理をしている気がします。

岩田 私は春から東京ですが、将来は北海道に戻ってくると思います。就職先は当初から民間企業を考えていましたが、夕張市や羅臼町の活動で熱意のある人たちにたくさん出会いました。公務員試験の勉強が間に合えば、就職したいと思ったほど。でも無理だったので、北海道の魅力伝える仕事を民間企業の一員としてお手伝いしたいと思っています。

関口 将来、北海道に戻ってくるとき、今よりこんな点が良くなってほしいという要望はありますか。

岩田 あえて挙げるなら働く場です。起業しようとは思っていないので、私の思いを受けとめてくれる働く場があってほしい。北海道は一次産業や食品工場などが中心なので、企業の多様性がないと思います。でも、住むことに関する不満はありません。

田村 一度、北海道外に住んでみることは大切かもしれませんね。

市川 北海道の方々はおおらかで開放的ですが、一方で北海道というくくりの中での閉鎖性を感じます。いい意味でも悪い意味でも「道産子」ということへのこだわりが強い。そこが好きなところでもあり、もったいないと思うところでもあります。

太田 それは僕も感じます。本州に対して海外のような意識があります。僕らは同じ日本の仲間と思っているのに、すごく薄いけれど壁があるような気がします。

関口 北海道の人は本州のことを「内地」と言います。その言葉に表れているかもしれませんね。

田村 石川啄木が小樽にやってきたとき、「かなしき

岩田 美津希 (いわた みつき)

札幌市生まれ。北海学園大学経済学部地域経済学科4年。西村ゼミで地方財政論を専攻。函館市における合併前後の市民と行政の距離感の変化、羅臼町における世界遺産登録前後の観光資源と基幹産業の変化などの研究活動や財政破綻後の夕張市における映画祭を通じた活性化活動などに携わる。卒業後は東京のベンチャー企業でBPO（ビジネスプロセスアウトソーシング）を行う。

日本各地にある数えきれないほどの魅力を見つめ、伝えることで誇りや幸せを自覚できる社会にしたい。

は小樽の町よ 歌ふことなき人人の 声の荒さよ」という短歌を詠んでいます。うたを詠むような文化や情がないという意味のようですが、とても残念に感じました。北海道人は感情を出さないということなんですか。消極的な部分を積極性に変える方法があれば、もっとオープンになってブラキストン線^{*2}を意識しないようになるのでしょうか。

戸来 私は、北海道の閉鎖性のようなものはあまり感じていません。雪が降るか降らないかだけの違いのように思います。

岩田 私も同じです。

市川 北海道の皆さんは、北海道というアイデンティティに対する執着が強いと思う。決して悪いことではないけれど、それが情報面などで妨げになっているのではないかと感じる場合があります。

岩田 北海道への執着という意味では、確かにそういうところがあるかもしれません。

発信力・受信力の強化と北海道ブランドの更新を

田村 大学のゼミやサークル、部活動を通じて、こうすればもっと北海道が魅力的になると感じたことはありますか。

市川 発信力ですね。緑のサークル活動で、かつて炭鉱で栄えた歌志内市に行きました。1トンの石炭塊のみこしを担ぐ「しょってけ祭り」という面白い祭りを開催していますが、市外の人にはほとんど知られていない。道内各地にはびっくりするようなきれいな自然がたくさんありますが、伝わっていない。とっても残念です。

岩田 確かに発信力は弱いと思います。でも、先日ニュースで見た地域ブランド調査では、道内市町村の順位がずいぶん上がっていました。発信力が弱いだけではない要因があるような気がします。

調査に行った羅臼町では加工業者らが集まって地元の特産物作りを進めています。商学部の友人も知らなかったのですが、就職前に商品開発に関わることで



市川 郁也氏

できれば学生もいい経験になります。そういう取り組みはもっと発信してほしいと思います。ふるさと納税の返礼品として差別化した商品を開発したいということなので、大学生のアイデアを生かせるかもしれません。

戸来 確かに発信力は足りないかもしれません。昨年夏にゼミで岩見沢合宿があったのですが、ほとんど観光客がいない状況でした。一方で、ウィンタースポーツを生かして外国人定住化に成功しているのがニセコ町です。成功の鍵の一つが、住民みんなで地方創生に関わっていきこうという姿勢だと思いました。地域ごとの強みを磨いていけば情報発信にもつながるし、それが地域の活性化をうながしていくと思います。

田村 みんなの意見からは、ニュースやインターネット上に、多言語で情報を発信するだけではないと感じます。どんなことを発信すべきでしょうか。

市川 まずはブランディングです。昔からある、海鮮がおいしい、自然がきれいという、北海道のブランディングと強みはしっかり固まっていて、全国に浸透しています。でも、それに続くものが出てきていない。美唄市の焼き鳥とかB級グルメもあるのに、全く際立ってきていない。「でっかいどう、北海道」に続くもの、例えば羅臼町には羅臼岳がある、釧路市では勝手井が食べられるなど、北海道なら重箱のようにてんこ盛りで楽しめる、味わえるということをもっと打ち出していくべきだと思います。

田村 旅行エージェントや行政が作った北海道ブラン

市川 郁也 (いちかわ ふみや)

大阪府八尾市出身。北海道大学工学部国土政策学コース社会基盤計画学研究室4年。2012年4月に北海道大学に入学し、来札。YOSAKOIソーランチーム北海道大学「緑」に所属し、全道・全国各地のお祭りに参加。各地で懸命に地域活性に取り組む人々に触れ、まちづくりというキーワードに興味を抱く。大学での研究のテーマは「ソーシャルネットワークの観点から見た持続可能なまちづくり」。



太田 哲平氏

受信力の弱さにつながる力のなさが課題。そして、広い北海道だからこそ、交通ネットワークの先進地にしたい。

ドを更新できていないと。

関口 多重性がない、魅力の層が薄いということなのでしょうね。具体的に、ブランディングや発信力で皆さんが関心を持った地域や場所はありますか。

岩田 神戸市です。異人館を活用したおしゃれでかわいいスターバックスの店舗があり、行ってきました。文化振興をしながら、マーケティングにも成功している例だと思います。

戸来 私はディズニールランドです。これまで5、6回は行っています。北海道にもルスツリゾートなどのテーマパークはありますが、違いがあります。ルスツはまだいいですが、岩見沢市にある北海道グリーンランドはほとんど行きません。ちょうどゼミでルスツとグリーンランドの違いを調査しているところです。

太田 観光客が増えるのはいいことですが、そこで生活している人がいるわけですから、まず住んでいる人が満足してこそ、まちが良くなっていくことも忘れてはいけないと思います。また、僕は発信力だけでなく受信力の弱さも感じています。隣町で面白いことをやってもみんな知らないと言います。北海道の広さが背景にあるのかもしれませんが、関東や関西は情報同士がつながる力があるように思います。

岩田 昨年、別海町で開催された「インカレねむろ」に参加しました。根室管内で調査研究した大学が集まって研究発表を行ったのですが、そういう情報共有の場もあります。でも、その場がなければ調査したこ

とすら知らないままになってしまいます。インカレねむろをきっかけに別海町の公務員試験を受けた学生がいるほど意欲的な取り組みでした。

田村 公務員試験を受けた学生は、どこに魅力を感じたのですか。

岩田 役場職員や漁協職員と会話していると、みんな柔軟性があり融通も利きます。国に頼らず、住民を巻き込んで地域を元気にしていこうという思いや誠意を持って一生懸命頑張っていることがわかりました。この人たちと働きたいと心を動かされたようです。

田村 就職となると大きな決断です。地域に魅力を感じる学生が増えているのですね。先ほどの太田さんの受信力という指摘は、つながる力の弱さでもあり、一道民としてちょっと残念です。

市川 外国人に人気のスポットの一つに、山梨県富士吉田市にある新倉山^{あらくらやませんげん}浅間公園があります。園内で富士山と赤い五重の塔、春の満開の桜が一望のもとに見渡せるので、“THE JAPAN”な絶景として外国人が集まっています。瀬戸内しまなみ海道はサイクリング好きの人たちの聖地になっていて、世界的に有名な台湾の自転車メーカー・ジャイアントが出店し、レンタサイクルもあります。北海道でも、これまでの海鮮や雪のイメージだけでない、北海道ならではの面白いコンテンツが発信できれば、新しい世界が開ける気がします。例えば、名馬ディーブインパクトが育った安平町で、誰でも馬を借りられてレンタホースで観光を楽しむことができるような企画ができれば、非常に面白いかもしれません。

田村 一枚看板の下に多様で多彩なコンテンツをたくさん創っていけば、看板も変えられます。B級グルメもある、様々な体験もできることが発信できれば、北海道の層の厚みが増してくると思います。自然や食などのたくさん魅力があることはみんなが認めているので、新しいブランドを確立して発信していくことが大切ですね。

太田 哲平 (おおた てっぺい)

札幌市生まれ、東京育ち。室蘭工業大学工学部4年。建築社会基盤系学科で土木工学を学んでいる。古本を回収し提供する「室蘭本まつり」など、本を通したまちづくりに関わる。2015年6月から10カ月間、宮城県女川町で教育を通した復興支援に携わった。研究テーマは「北海道帝国大学附属土木専門部文庫にみる室蘭工業大学の土木教育の変遷」。

北海道は、もっと“はっちゃけ”てもいい。もっと楽しく。除雪だって観光のコンテンツになります。

日本、北海道における国際化に向き合うために

田村 北海道の自然は充分認知されていても、北海道の文化とは何だろう。例えば、アイヌ文化はどうか。

太田 僕は東京出身なので、アイヌについては、教科書で読んだ程度の知識です。

戸来 私の大学にはアイヌを専門にしている教授がいます。アイヌ文化を学べる大学は珍しいと思います。

岩田 アイヌをモチーフにしたアート活動をしている人を知っていますが、その程度です。

関口 北海道には白老町にアイヌ民族博物館がありますし、2020年の一般公開を目標に「民族共生の象徴となる空間」の整備が進められています。札幌市南区の小金湯温泉には札幌市アイヌ文化交流センター「サッポロピリカコタン」があり、ほかにも平取町や阿寒湖温泉にアイヌ文化が色濃く残っています。

田村 札幌駅そばのチ・カ・ホ（地下歩行空間）にはアイヌアートのタペストリーが飾られていて、外国人には魅力的に受けとめられているようです。

市川 欧米人は民族文化やいろいろな文化体験への関心が高いと聞きます。

田村 オーストラリアなどは先住民保護と経済活動を結びつけるような取り組みをしているので、北海道も見習うべきかもしれませんね。

では、ロシアとの距離感はどう感じていますか。

太田 ロシアとの距離感は遠いと感じます。北海道の隣国なのに道内で見かけるのは中国人が多い。もったいない気がしています。稚内市に行ったとき、サハリンが見える距離にあるのに、とても遠いと感じました。むしろアメリカのほうが近い印象です。歴史的な背景があるのはわかりますが、私たちの世代は、あまりそこにこだわらずに交流できると思います。せっかく近くにサハリンがあるのだから、もっと交流してもいいと思います。

戸来 私の大学は国際交流に積極的なので留学生もたくさんいます。でも、留学生はロシアよりも中国人が多く、中国のほうが近い印象です。ゼミにも中国人が



戸来 祐紀氏

たくさん参加しています。

田村 ロシアは近くて遠い国という印象なんですね。

岩田 でも、羅臼町の皆さんはロシアには複雑な感情を持っています。ロシアのトロール船問題を何とかしてほしいというのが本音だと思います。現実的なロシアとの交流は、難しい問題を抱えていると思います。

市川 太田さんは先ほど観光客よりも、まず住んでいる人が満足できることが大切だとお話しされましたが、現実的にはそれだけではもはや経済が立ちゆかなくなっていると思います。北海道だけでなく日本全体がそうです。これまでどおりの暮らし方では先細りする一方だと思うので、高度経済成長時代の社会の仕組みをどのように変えて、解決していくのが大切だと思います。そうすると、インバウンドや移民政策と組み合わせ考えていくしかないと思います。

太田 移民政策は日本全体でやろうとすると、失敗すると思います。北海道でも失敗すると思います。例えば、一都市だけの特区のような制度でやったほうが成功するのではないのでしょうか。僕はいろいろな国の人と話してみたい。シリアのご飯を食べてみたいし、本場の中国料理も食べてみたい。働き手として考えるといろいろな課題があると思いますが、一人の友達として日本にやってきてほしいと思います。少子高齢化で働き手として求めるのはわかりますが、まずは一人の人間として、友達として受け入れていくべきではないのでしょうか。

戸来 祐紀 (とらい ゆうき)

札幌市生まれ。札幌大学地域共創学群経営学専攻3年。2年生から中山ゼミに所属。2015年にSCAN大会で「ニセコに学ぶ地方創生のあり方と大学に出来ること」を発表し、優秀論文賞を受賞した。ほかに札幌市豊平区で開催された「フェスタつきさっぷ」などの運営にも携わる。趣味は音楽鑑賞と読書で大学の吹奏楽団に所属。



関口 麻奈美氏

道産子の、北海道は特別だというこだわりが、郷土愛や誇りでもあるけれど、“内地”や海外との間に壁を作っているのかもしれない。

田村 移民を受け入れる仕組みの難しさよりも、まず大切なことは会ってみたい、話してみたいという思いですね。

市川 外国人を受け入れていくにあたって、われわれ日本人の国民性がネックになってくると思います。留学生の友達に言われてショックだった言葉があります。「なんで日本人は、私たちガイジンとの交わりを避けるの?」。私たち日本人が差別感情を抱いていなくても、島国気質もあってか、外国人との接し方があまりにもよくわかっていないのだと思います。せっかく日本に来てくれた外国人に、知らず知らずのうちに孤独や疎外感を抱かせてしまっているかもしれないのです。このまま外国の方々をたくさん呼んでも、失礼になるでしょう。拙い発音でもいいので、ハローと声をかけて手を差し伸べることができるように、教育などを通して改善していくことが大事だと思います。

北海道ならではの文化と掛け算の発想

田村 岩田さんは春から東京に行きます。東京に何を求めているのでしょうか。

岩田 アーティストとの交流です。著名なアーティストの講演などは東京でしか開催されないことがあります。道内にたくさんギャラリーはありますが、裸体を被写体にしたような前衛的なアートにはまだまだ閉鎖的です。新冠町に「太陽の森ディマシオ美術館」もありますが、そうした個性的な美術館は数が少な過ぎま

す。全国各地でアートを活用した地域活性化としてトリエンナーレ^{※3}が開催されていますが、国や自治体が資金支援しているので、行政を風刺する作品は出展できないと聞きます。本当の意味でのアート活動が地方では難しい気がしています。

関口 アートという点で、戸来さんも音楽活動をしています。

戸来 北海道に限らず、全国的に吹奏楽は盛んになっています。夏にはコンクールが盛んですし、高校でも吹奏楽は人気です。札幌交響楽団は全国的にも有名で、音楽活動という点では地域間格差はないと思います。

田村 かつて、オランダの航空会社KLMが新千歳空港に乗り入れていたことがあります。その時期にオランダ人の発案で、冬のファッションショーが開催されたことがありました。冬のファッションショーは、北海道ならではの文化だと思います。

戸来 雪も一つの文化だと思います。

太田 室蘭で活動して感じるのは、掛け算の発想の大切さです。人口が少ないとイベントを開催するにもなかなか人が集まらない。そこで、例えば写真だけでなく、写真に何かを掛け算するのです。ファッションショーも冬を掛け算しています。単なるファッションショーならどこでもできますが、冬を掛け算するなら会場は北海道しかありません。北海道には自然と写真、食と自然、アイヌ文化と暮らしなど、掛け算になるものが多く、素材もたくさんあります。北海道が生き抜いていくためには掛け算の発想が重要で、掛け算がなければ東京に負けてしまいます。でも、掛け算があれば東京にも勝てます。

市川 考えてみると、YOSAKOIソーラン祭りも北海道の文化の一つになっています。YOSAKOIソーラン祭りは、もともと高知のよさこい祭りをモデルに、大学生が始めたものです。さっぽろ雪まつりも地元の中高生が大通公園に雪像を作ったことが始まりです。それが今では、札幌の二大観光資源になっていることを考えると、これから先も、学生の柔軟な発想力が北海道

関口 麻奈美 (せきぐち まなみ)

苫前町生まれ。天使女子短大卒業後、編集プロダクション勤務を経て1999年に独立し、個人事務所プランニング・メッシュを立ち上げる。編集業務やマーケティング調査業務に携わりながら、地域研究活動にも従事。本誌の地域経済レポート特集号『マルシェノルド』（『開発こうほう』3・9月号）の取材記者を務める。また、現在、「ほっかいどう社会資本整備の重点化方針」有識者検討会（北海道）の委員を務めている。

いくら海外から“研修生”を受け入れても、既存の情報を多言語化して発信しても、それだけでは、世界とつながる北海道にはならない。

や日本をオモシロくする可能性は十分あると思います。

将来の夢と北海道への思い

田村 最後に北海道への思いを聞かせてください。

岩田 私が大切にしているのは、自然に生かされているという感覚です。北海道ではどこでも生命を感じることができます。今は保育園も子どもにも怪我をさせるとクレームがくるので、おもちゃにも気を配っているほどです。でも、自然の中で人間らしい生き方を学ぶことのほうが大切です。最初にお話ししましたが、そう考える企業も増えてきているので、北海道に戻ってくるようになって、自然に生かされていることを感じられる仕事に関わっていきたいと思います。

戸来 私は生まれも育ちも北海道なので、道外での就職は考えたことがありません。でも、北海道で暮らしていると、もっと“はっちゃけ”てもいいのかなと思います。東京の真似をしようとは思いませんが、今までなかったようなイベントや活動を増やして、もっと北海道が楽しくなるといい。住んでいると雪は邪魔な存在ですが、かまくらを作って宿泊したり、除雪を観光のコンテンツにしてみるなど、地域振興のツールに活用していけば楽しいのではないのでしょうか。

田村 岩田さんから自然に生かされている、戸来さんから雪の話題が出ました。環境問題について考えることはありますか。

太田 テレビでは南の島が沈むと言っていますが、実際に見ていないものを感じることは無理です。自然環境の変化を感じるためのキーワードは自給自足だと思います。東北に行ってそれに気がつきました。漁師さんが、サンマが不漁でそれには温暖化が関係していると話してくれました。地元のものを食べていると地元の問題に敏感になります。地元のものをおいしく食べたいと思えば、自分が捨てたごみが食物にどんな影響を与えるのかを考えるようになります。身近なものを食べ続けていたら、環境問題も改善していくのではないかと思いました。環境問題も身近なところから



田村 亨氏

です。東北の経験から、僕は震災の記憶を伝える仕事をしたいと思っています。

北海道は少子高齢や過疎化など課題の先進地です。それが逆に面白いと思っていて、一か八かの勝負ができます。日本一どうしようもない地域になってしまうかもしれませんが、日本一課題を解決できた地域になっているかもしれません。今まで北海道は本州から学んできたと思いますが、将来、北海道が日本をリードするような地域になってほしい。それが僕の夢です。

田村 具体的にどんな分野の先進地であってほしいと思いますか。

太田 交通です。台風被害でJRが「道内旅行は再検討を」とHPに掲載しましたが、宿泊施設などの観光業の皆さんが頑張っている中で、あのような発信をするなんて、正直びっくりしました。もちろんJRやAIR DO、そのほかの観光業、自治体もみんな頑張っているのはよくわかります。でも、北海道は連携がないと思います。広いからこそみんなで団結しなければ、課題は解決しません。交通はまちとまち、まちと人、人と人をつなぐ大切な手段です。つなげるという意味からも、これからの交通ネットワークをどのように立て直していくのかに興味があります。そもそも、ガスや水道で「あなたのまちは田舎なので無理です」と言われたら怒りませんか。鉄道というインフラの特殊性はあると思いますが、なぜ鉄道だけ「田舎なのでごめんなさい」で許されているのでしょうか。北海道の人は

田村 亨 (たむら とおる)

北海道大学大学院工学研究科修了。東京工業大学助手、北海道大学助手、筑波大学講師、室蘭工業大学助教授・教授を経て、2012年10月から北海道大学大学院工学研究院教授。専門は国土・地域計画。社会資本整備審議会道路分科会委員、国土審議会北海道開発分科会計画推進部会委員などの委員を務める。

もっと怒っていいと思う。仕方がないという空気になっているのがとても残念です。

市川 JR九州は、列車の付加価値の付け方や観光地の結び付け方など、とてもうまく経営していて上場もしています。一方で北海道をみると本当にもったいないと思います。生活の足としてだけで考えると衰退する一方だと思います。維持管理費などを考えるとバスに転換するのが現実的だと思う一方で、JR九州の成功を見てしまうと本当に残念です。

市町村の魅力度ランキングでは北海道や道内各都市は毎年のようにトップにランクインしています。一方、都道府県の幸福度ランキングで北海道は40位。本当に、このギャップを埋めていきたい。就職をしたら海外に行く機会が増えると思うので、いろいろな国を訪れて世界中の魅力を知っていききたいし、それに対する日本の魅力も見つめ直していききたい。30代には、日本国内の様々な地域の魅力を発掘して発信できるようなプロジェクトをたくさん仕掛けられるような人になりたい。最終的には、行政や政治などにも関わることができればと思っています。

戸来 私はまだ3年生なので、まずは来年の就職活動です。できれば金融機関に勤めたいと思っています。部活動で会計を担当してお金を管理していますので、実際にお金の動きを体験したことが興味を持ったきっかけです。50人弱の部員がいますが、年間で200万円弱のお金が動きます。遠征や定期演奏会ではもっと大きなお金が動きますし、企業への協賛依頼も仕事の一つです。責任ある仕事で信用も重要ですが、学生時代の経験が役に立てばいいと思っています。

岩田 いろいろな地域で感じたことは、Airbnb^{※4}や修学旅行生を受け入れたいと思っている積極的なまちがある一方で、閉鎖的だったり、財政的に厳しいまちもあって、市町村間格差が大きなことです。太田さんが指摘したように、北海道が課題の先進地というのはそのとおりだと思いますが、まずは地元の皆さんに課題を認識してほしい。課題を認識することが、解決へ

の第一歩だと思います。過去の栄光にしがみついたり、地域として動くときに温度差があるために違う方向を向いてしまうことがあります。そこに学生が関わることで、何かを感じ取ってもらえれば、少しは役に立ったのかなと感じられます。

関口 今日は、私が皆さんと同じ世代のときには全く考えていなかったような深いお話をお聞きできて、密度の濃い座談会になりました。

田村 そうですね。お話を聞いていると、皆さんの現場感覚、スピード感とフットワークの良さがあれば、北海道の未来に大きな期待が持てると感じました。今日はありがとうございました。

※1 SCAN (北海道学生研究会)

Sophisticated Community and Academics for Networkingの略で2010年に立ち上がった北海道内の学生による学生研究会。調べることを通じて、企業・大学を含めた地域のつながりをよりよいものにしていくための活動で、地方の学生が地域問題に関して、学生ならではの研究発表を行っている。

※2 ブラキストン線

動植物の分布境界線の一つで、津軽海峡を東西に横切る線。

※3 トリエンナーレ

3年に1度開かれる国際美術展覧会。国際交流やまちおこし、観光客の集客、多様な国の多様な芸術に住民が触れることを目的に開催している。国内では大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ(新潟県)、横浜トリエンナーレ(神奈川県横浜市)、あいちトリエンナーレ(愛知県名古屋・豊橋市・岡崎市)などが開催されている。

※4 Airbnb

ホテルなどではなく、世界各国の人たちが、自宅などを宿泊施設として提供するインターネット上の仲介サービス。英国式の朝食付き宿泊(施設B&B)に由来する。